

令和6年度農林水産技術会議結果概要

水産技術センター

開催日	令和6年10月10日	開催場所	水産技術センター内水面試験場
部会名	研究課題設定部会		
評価課題	内水面漁場環境保全再生研究		
評価委員	山梨県漁業協同組合連合会 参事 神奈川県内水面漁業協同組合連合会 参事		
評価概要	○内水面漁場の環境は、降雨災害の激甚化等の影響により近年急速に悪化傾向にあり、その保全再生は急務といえる。今日的課題である漁場環境と外来生物に関する研究であり、早急に実施し、その成果が活用されることが望まれる。 ○土木サイドと連携した既存データの活用等が期待されるが、これらを単にデータベース化すること自体が目的になってしまわないよう注意が必要である。 ○5年間に渡る調査であることから、適宜調査や再生状況の結果をフィードバックさせて、順応的管理によりよい効果的な研究の実施をすることが望まれる。 ○外部機関の協力、現場では漁協や業界が協力し、力を合わせてそれを試験場でまとめてもらえれば、目標が達成できると思う。漁業者も川の危機感を強く抱いている。この研究の目標を理解すれば、喜んで協力してくれると思う。		

開催日	令和6年9月11日	開催場所	水産技術センター
部会名	研究成果評価部会		
評価課題	サザエ不調対策研究		
評価委員	東京大学農学生命科学研究科魚病学研究室 教授 神奈川県栽培漁業協会 専務理事		
評価概要	○目標については、例えば、生産量とか生残率とかそういったものを目標としてもよかったのではないかとコメントしておく。 ○感染症は、どういう死に方だったのかを記録し、収集しておいた方がよい。感染実験などについては、今後やる機会があれば協力する。研究の構成としては妥当だったと思う。 ○研究成果の達成度は、達成したと考えている。ただし、もしかしたら復活に不要な作業が含まれているかもしれないので、その点さらに検討しマニュアルに反映していくとよい。 ○総合的にみて、目標に対して実用性のある研究成果が十分得られたものと考えている。 ○研究の構成として、魚病説、環境説、餌料説を取り上げたことは適切だったと思う。ただし、餌料の検討において、もう少し色々な情報を集めて検討してもらいたかった。ウルベラについて検討しなかったのは残念である。 ○研究成果として、直飼は栽培漁業協会が先行して行っていたが、作業効率など色々な面で、比較検討することができ成果であると言える。このような成果が栽培漁業協会の100万個の種苗生産体制を構築するに至ったと思う。 ○サザエの種苗生産が水産技術センターから栽培漁業協会に移管され、県内外にサザエ種苗を供給できるようになった。環境の変化が続く中、今後、新たな課題が発生する可能性があり、今の方法がベストとは限らない。改めて試験研究が必要なことが起きる可能性がある。		